

近代哲学の基本三公理について

——動物論をてがかりに——

古茂田 宏

(一橋大学)

「動物 (animal)」は、アリストテレスやスコラ哲学において、理性的な働きは持たないにしても、音や光や痛みや喜びを感じる「心 (animus)」を具えた存在であると考えられてきた。それはおおむね、人々の素朴な直観とも合致する見解であったろう。しかし、この常識的な見方に鋭く挑戦したのは、思惟する実体 (心) と延長する実体 (物体=身体) を峻別し、その各領域の純粋な自律性——と、とりあえずは言うておく——を確保しようとしたデカルトであった。デカルトは、人間以外の動物には理性がないだけではなく、感性的表象能力も含む心 [内側] そのものが無いと、つまり物的な入力と出力しかもたぬ精巧な機械であるとあえてみなしたのだ。だが、解剖学的組成から見れば人間の身体も動物のそれと原理的には同一である以上、その人間の心なるものは——ギルバート・ライルの揶揄的な表現を借りれば——「機械の中の幽霊」のような奇妙な存在として掴まえられることになる。こうした世界の描像は、たとえそれがどれほど奇妙な話につながっていくにしても、人間という高度に精神的な存在を、自然的・機械的・「動物的」な次元に平板化することなく——ホブズはそれをやり遂げたわけだが——把握したいという、それはそれで理にかなった動機に支えられていたように思われる。

ところで、進化心理学者のスティーヴン・ピンカーは、このデカルトの人間/動物論 (精神/身体論) は、一見それと矛盾する他のいくつかの世界像と交響しつつ、近代的な基本図式を成立させてきたと指摘している (“*The Blank Slate*”, 2002.)。ひとつは、ロックの「タブラ・ラサ」説であり、もうひとつは、ルソーの「高貴な未開人」像である。ロックによれば、人間の心はもともと文字を全く欠いた白紙 [石版] であって、「慌しくとどまることを知らぬ心象が無限に近い多様さで描いてきたこの膨大な蓄え」は、そのすべてを「経験」に負っている。これをパラフレーズすれば、我々の抱く一切の観念は、どれほど自然 (生得的) なものに見えようとも、後天的経験によって刷り込まれた構成物に過ぎないということになるろう。一方、ルソーにおける純粋無垢な「高貴な未開人」イメージも、ロックのタブラ・ラサ説の道德哲学的変奏とみなすことができる。文明社会に生きる人間の欲望や知性の形は、どれほど「自然」なものに見えようとも、自然から切断された市民社会の転倒を身に蒙った悪しき「構成物」であるにすぎず、そのようなものを道德的正当化の根拠にしては——これもまたホブズがやりぬいたことだったが——ならぬ…という主張に、その変奏は辿り着くからである。

ピンカーのこうしたまとめには多くのコメントが要るが、しかしデカルト、ロック、ルソーという近代の巨人たちの基本公理が、いずれも人間の精神・観念・欲望の、自然

性からの切断という図式の上に打ち立てられたということは重要な論点であり、それが人間と動物の切断図式にも密接に関わっていたこともまた明らかである。報告では、ピンカーが進化論の立場から激しく攻撃するこの基本公理——それは、社会的構成主義という現代に普遍的なスタンスに脈々と継承されている——のもつ含意とそれへの評価を、デカルトとビュフォンの動物論を独特な仕方で批判し、進化論とは無縁の地点から人間と動物の心の連続性を主張したコンディヤックの『動物論』を補助線として使いながら考えてみたい。